
 学 会 記 事

第 221 回新潟外科集談会

日 時 昭和60年11月30日(土)
午後12時30分
会 場 有壬記念館(新潟大学旧本部)

1) 高脂血症の妊婦に発症し、著しい低カルシウム血症を呈した急性膵炎の1例

神田 達夫・吉川 恵次 (新潟大学)
片柳 憲雄・富山 武美 (第一外科)
佐藤 攻・吉田 奎介

急性膵炎の原因のひとつに高脂血症があげられているが、実際、臨床の場で遭遇する機会は少ない。

一方、急性膵炎の重篤な合併症のひとつに低カルシウム血症があり、高脂血症がその発生に関与していると推察されている。

我々は、高脂血症が妊娠を契機に悪化し、高度の低カルシウム血症を伴った急性膵炎を引き起こした一症例を経験した。本例では、帝王切開術により正常児の娩出を得、同時に膵炎に対して腹腔内ドレナージ、胆嚢外瘻術を行った。術後、テタニーを伴う著しい低カルシウム血症がみられ治療に難渋したが、治癒せしめることができたので報告する。

2) Insulinoma の1症例

一診断および代謝面からの考察—

佐藤 攻・清水 武昭(信楽園病院 外科)
堀川 楊 (同 神経内科)
山田 幸男 (同 内分泌内科)
三科 武 (新潟大学第一外科)

Insulinoma についての知見は多く、知識としてはよく知ってはいるが、日常臨床の場で症例と遭遇する機会は稀である。当科では最近この1例を経験したので報告する。症例は64歳女性で昭和59年9月に早期胃癌のため胃亜全摘術を受けた。術後4週目にはじめて低血糖による精神症状出現。その後、精神症状が頻発するようになり、当院を受診。入院後 Whipple の三徴が確認され Insulinoma と診断された。確定診断のため、絶食試験・経口糖負荷試験・インスリン負荷試験等が施行され、さらに血管造影・門脈血中 IRI 値測定により局在が確定

された。手術は腫瘍摘除術が施行された。術直後より血糖値は上昇し、術後各種検査により治癒が確認された。

本症例の診断の要点、切除標本の免疫組織学的検索、術後経過における糖・脂肪酸・アミノ酸代謝の変化について若干の知見を得たので文献的考察も加えて報告する予定である。

3) 当科における胆嚢癌切除例の検討

吉岡 一典・阿部 僚一 (県立吉田病院)
宮下 薫 (外科)

当科で30年間に扱った胆嚢癌は60例で男女比は1:2.5であった。これらのうち切除できたものは21例(35%)で、内訳は治癒切除12例、非治癒切除9例であった。超音波診断、CT 更に経皮経肝胆嚢穿刺により術前診断され、治癒切除可能な症例も増えつつある一方、胆嚢後診断された例もあり、特に早期癌表面型2例は肉眼診断困難であった。切除症例の予後は8年現存が2例あるが、いかに治癒切除と言っても長期生存はほぼ Stage I に限られ、壁深達度は漿膜下層まで、病巣が胆嚢内にとどまるもののみ期待されよう。治癒切除後の死因はリンパ節再発2例、肝転移1例などであった。手術成績向上のためには早期診断はもとより、術中に早期癌を見逃さないようにすることが大切で Stage I では拡大胆嚢、R₂ 郭清は必須であり、それ以上の進行癌に対する安全かつ合理的な術式の確立が当面の課題と言える。

4) 当院における副腎腫瘍の臨床的経験

星山 奎鉉 (柏崎市金沢病院 外科)
星山 真理 (同 内科)
田宮 洋一 (新潟大学 第一外科)
田中 瑛浩 (富山医科薬科大 学泌尿器科)

副腎腫瘍はその解剖学的位置、内分泌機能等により、他の臓器腫瘍にない特徴を有している。われわれは5例の副腎腫瘍を経験したので、これらの症例の診断、手術方法、術前後の経過を報告する。

5症例のうちわけは、褐色細胞腫1例、Primary aldosteronism 3例、内分泌非活性副腎皮質癌1例で、4例に手術を行った。性別は男3例、女2例で、年齢は47歳より74歳に亘っている。診断は内分泌機能検査、臨床症状等より、ほぼ副腎腫瘍の存在が疑われ、CT、echo 等の検査で部位診断がなされた。内分泌非活性副腎皮質癌は右上腹部の腫瘤と鈍痛があり、後腹膜腫瘍の診断で